

## PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 2001-322998

(43)Date of publication of application : 20.11.2001

(51)Int.Cl.

C07K 14/00  
B09B 3/00  
C09K 3/00

(21)Application number : 2001-083516

(71)Applicant : NATIONAL FOOD RESEARCH  
INSTITUTE  
JANIFU TEKKU:KK

(22)Date of filing : 28.06.1999

(72)Inventor : NAKAJIMA MITSUTOSHI  
NABEYA HIROSHI  
MIZUNO MASAYUKI  
NATATSU YOSHITAKE

## (54) NOVEL FEATHER FINE POWDER AND METHOD OF PRODUCING THE SAME

## (57)Abstract:

**PROBLEM TO BE SOLVED:** To provide a novel technique for multilaterally effective utilization of the feather resource at a high level as a new material of the zero environmental load in no need of use of a large amount of solvents as in the case of conventional feather processing.

**SOLUTION:** This novel feather fine powder retains the  $\beta$ -structure and is obtained by pulverizing the feather without the molecular weight-lowering treatment with weak alkali, drying the resultant liquid product and grading the particle sizes by pulverizing the product, when necessary. In the process for producing the objective feather fine powder, the feather is pulverized without lowering the molecular weight of the feather by weak alkali treatment, the resultant liquid product is dried and the particle size are graded by crushing the dried product, when necessary.

## LEGAL STATUS

[Date of request for examination]

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C) 1998,2003 Japan Patent Office

(19)日本国特許庁 (J P)

## (12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2001-322998

(P2001-322998,A)

(43)公開日 平成13年11月20日 (2001.11.20)

(51)Int.Cl.  
 C 07K 14/00  
 B 09B 3/00  
 C 09K 3/00

試別記号  
 ZAB  
 104

F I  
 C 07K 14/00  
 C 09K 3/00  
 B 09B 3/00

104Z  
 ZABZ  
 3032  
 3042

マーク (参考)

審査請求 未請求 請求項の数6 OL (全11頁)

(21)出願番号 特願2001-83516(P2001-83516)  
 (22)分割の表示 特願平11-18133の分割  
 (22)出願日 平成11年6月28日 (1999.6.28)

(71)出願人 50114525  
 独立行政法人 食品総合研究所  
 茨城県つくば市観音台2丁目1番地12  
 (71)出願人 59611160  
 株式会社ジャニフ・テック  
 京都府千代田区神田神保町2丁目46番地  
 (72)発明者 中嶋 光敏  
 茨城県つくば市観音台1丁目17-11  
 (72)発明者 鎌谷 治遠  
 茨城県つくば市吾妻2丁目14-911-402  
 (74)代理人 100102004  
 弁理士 梶藤 政彦

最終頁に続く

(54)【発明の名称】 新規な羽毛微粉体及びその製造方法

## (57)【要約】

【課題】 新規な羽毛微粉体及びその製造方法を提供する。

【解決手段】 羽毛の構造を保持した微粉体であって、羽毛を微弱アルカリ処理により低分子化することなく微細化処理し、得られた液体生成物を乾燥し、必要により粉碎処理してなる羽毛微粉体、羽毛を微弱アルカリ溶液で処理して低分子化することなく微細化処理し、得られた液体生成物を乾燥し、必要により粉碎し、整粒することを特徴とする羽毛微粉体の製造方法、及び当該羽毛微粉体の加工品。

(2)

特開2001-322998

2

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 羽毛のβ構造を保持した微粉体であって、羽毛を微弱アルカリ処理により低分子化することなく微細化処理し、得られた液体生成物を乾燥し、必要により粉碎処理してなる羽毛微粉体。

【請求項2】 微弱アルカリ処理が0.1～1%のカセイソーダ溶液による処理であることを特徴とする請求項1記載の羽毛微粉体。

【請求項3】 羽毛のβ構造を保持した微粉体を羽毛の微弱アルカリ処理により製造する方法であって、羽毛を微弱アルカリ溶液で処理して低分子化することなく微細化処理し、得られた液体生成物を乾燥し、必要により粉碎し、整粒することを特徴とする羽毛微粉体の製造方法。

【請求項4】 微弱アルカリ処理を0.1～1%のカセイソーダ溶液により行うことを特徴とする請求項4記載の羽毛微粉体の製造方法。

【請求項5】 請求項1又は2に記載の羽毛微粉体を適宜の形状、構造に成型、加工してなる羽毛微粉体の加工品。

【請求項6】 請求項3に記載の方法で製造した羽毛微粉体からなる紫外線吸収剤。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、従来、報告されているような革に羽毛を可溶化、低分子化してなる羽毛粉末体や機械的粉碎法により得られる羽毛微細粉末等の既存の羽毛微細化粉末とは本質的に区別される全く新しいタイプの羽毛微粉体に関するものである。更に詳しくは、本発明は、羽毛のβ構造を保持した微粉体であって、羽毛を微弱アルカリ処理により低分子化することなく微細化処理し、必要により粉碎処理してなる新規な羽毛微粉体、当該羽毛微粉体を簡単な操作で、低コスト、高効率に製造することを可能とする上記羽毛微粉体の製造方法、及び当該羽毛微粉体の加工品に関するものである。本発明は、羽毛を、単にアルカリで可溶化、低分子化したり、機械的粉碎法で微粉化したりするのではなく、羽毛を微弱アルカリ処理により低分子化することなく微細化処理して、羽毛のβ構造を保持した微粉体に導くことを特徴とするものであり、本発明は、これにより、従来の羽毛処理技術のような大量の溶剤の使用による環境への負荷の恐れが全くなく、羽毛をいわゆる環境負荷ゼロ型の新素材として多角的に活用することを可能とする、新しい羽毛資源の高度有効利用技術を提供するものである。

## 【0002】

【従来の技術】 羽毛を構成している物質の一成分である\*

## (羽毛の加工、利用技術)

- ・粉碎(機械的粉碎法による微細化) 一 新機能素材・改質剤
- ・アルカリ溶剤 一 リン酸中和 一 有機質肥料

\* ケラチンは、卵蛋白質の一種であり、水その他の有機溶媒に不溶で、物理・化学的に安定であり、強度、防水性、保溫性、耐光性などに優れており、羽毛の他、鶏毛、羊毛、毛髪、爪、ひづめ、角、鱗、皮膚などに、高率で含有されている。従来、羽毛の利用技術として、様々な方法が提案されているが、そのほとんどは、このケラチン蛋白質を可溶化、低分子化する方法に関するものである。我が国で1年間に発生する羽毛の量は、ブロイラーを中心に約4万トンに達するが、その利用については、全く道が拓けていないというのが現状である。食鳥処理場等から排出される羽毛には、血液をはじめとする大量の有機物を含む水溶液が抱合されており、これらは、野外に放置された場合には、巣吸収以外には、数日中に巣虫を放ち、公害の元凶の一とされている。ただし、この場合においても、巣虫の源は、抱合水に含まれる鶏由来の有機成分、即ち、血液、体液、内臓、排せつ物等の腐敗臭であり、羽毛自体は変化を受けず、現実的な処分方法として、羽毛のはば全量が産業廃棄物として埋め立てにより処理されているのが実状である。

【0003】 羽毛の他の利用方法として、フェザーミールがあり、当該フェザーミールは、羽毛の積極的な活用法として確立されているが、その生産性の低さ(羽毛からの歩留りは30%、原単位3.3.1万羽の鶏を処理しても、フェザーミールの収量は、約600kg)から、また、その市場性の低さもあって、妙味のある事業とは考え難い状況にある。フェザーミールの組成は、水分4～5%、粗蛋白9.0～9.3%、人工消化率8.2～8.4%、アミノ酸は、シスチン、ロイシンが多く、リジン、メチオニン、トリプトファンが少なく、アミノ酸バランスが悪いために、当該フェザーミールの飼料成分としての配合比率は、鶏の場合で2～5%、豚の場合で5%が限界である。フェザーミールは、国内における実験の使用量は明確ではないが、主として米国から輸入されている。ただし、飼料成分の表示義務に伴うイメージダウンへの懸念から、その需要は漸減傾向にあるといえる。

【0004】 近年、南米を中心とする海産物の漁獲量の中で、特に“いわし”的漁獲量の減少が続き、飼料用途の蛋白源の確保が困難となり、このことが、飼料価格、40ひいては食肉製品の高騰につながっている。他方、生活水準の向上から、世界的な食肉製品への需要の増加がこの恩禱環に拍車をかけ、これらの問題は、深刻な経済を呈してきている。

【0005】 これらの分野における先行技術として、例えば、羽毛の有効利用に関する報告は、科学文献、論文、特許文献等を含めて膨大な数にのぼるが、その技術内容を大別すると、概略、次のように分類される。

(3)

特開2001-322998

3

- ・前述② 一 酸素処理
- ・前述② 一 蛋白・ペプチド

## 【0006】(1) 新穎素材・改質剤

この分野では、羽毛微粉末の粉体特性を利用した、新穎素材、表面改質剤としての活用が報告されている(特開平6-345976号公報、Chemistry Express, 8, 537-540(1993))。上記羽毛微粉末は、粉碎機で粉碎して調製したものであり、調製プロセスが複雑になることが否めない。

## 【0007】(2) 有機質肥料

この分野では、代表的なものとして、例えば、有機質肥料及びその製造方法が報告されている(特開平9-118576号公報)。羽毛を肥料化するには、羽毛を一旦溶解しなければならないという難点があるが、羽毛の肥料化は、羽毛の大消費につながる可能性がある。

## 【0008】(3) 調味料、飼・肥料、化粧品、新素材

この分野では、「蛋白・ペプチド」を通じて新素材として活用する方法を含め、羽毛を多様な手法で改質する方法が提案されており、例えば、酵素の組み合わせによる調味料の製造(特開平6-46871号公報)、羽毛蛋白とオイルから芳香油を製造する方法(特開平7-115902号公報)等の他、スキンケア、ヘアケアなどの化粧品基剤への活用の特許文献は、枚挙に暇がないほど存在している。しかし、いずれの場合も、素材の使用量が限られており、羽毛資源の有効利用という観点からは満足のいくものではない。

【0009】羽毛資源の有効利用の前提となるのは、あくまでも「大量処理」であり、その意味では、大量処理を専長かつ低成本で実現できる新しい羽毛製品の生産技術の開発と、羽毛の固有の特質(物理・化学・生物学的安定性、保温・断熱・耐光・はつ水性等の特性)を生かした新しい用途開発こそ、今日の時代の要請に適う方向と考えられる。

## 【0010】

【発明が解決しようとする課題】上記のとおり、羽毛は貴重な蛋白成分より成る重要な未利用資源でありながら、その安定性のゆえに、産業廃棄物として専ら埋め立てにより処理されてきた。そして、数多の先行する研究報告、特許文献の存在にも拘わらず、実体的な利用が未だ達成されていない現状は、先人の努力が、現実の用途に未だ結びついていない既しともいえる。羽毛は多孔性を有し、その極めて優れた特性(物理)が鳥類全般の保護(例えば、保温、保冷、放熱、吸湿、耐光、耐水など)に役立ってきた。そして、その微粉体が、素材として有用なことは、上記特許文献等においても明らかにされている。しかし、羽毛の「軽い」という特性が、その微粉化の大きな妨げとなってきた。

【0011】従前の羽毛の粉碎は、主として石臼式回転磨碎とボールミル式磨碎によって行われている。しかし、これらの方では、使用するグラインダー素材の磨

4

- 一 調味料、飼・肥料、化粧品
- 一 新素材

耗分の混入が著しい(通常、直置ベースで粉碎物の10~25%)こと、物理的な微細化工程を通過することにより、羽毛に固有の内部中空構造の部分的な破壊は避けられないこと、等から、羽毛本来の構造的特性を有する羽毛微粉体の大型取得は、極めて困難であった。そして、このような粉碎法による微粉体の製造には、制約条件が多く、対象物質の変成防止の観点から、低温で実施する場合には、湿式法によらざるを得ず、仕込み量・処理量が限定され、用いる溶媒が水以外の有機溶媒の場合には、爆発等の要因を加味した配慮が重視となる。また、乾式法による場合も、機械的強度に優れた物質を、無理やり粉碎することになるので、粉碎操作中の発熱を避けるためには、低速での運転が不可欠となる。このような制限因子の掛け合わせに由来する操作条件の制約から、従来の方法による羽毛の大量処理の困難さは容易に理解されるところである。したがって、得られた微粉体は、必然的に高価であり、仮に素材として必要な機能を保持していたとしても、その用途は極めて限定的にならざるを得ない。まさに、この点が、これまでの羽毛の微粉化方法の限界であったと言っても過言ではない。

【0012】このような現状に鑑み、本発明者らは、産業廃棄物として埋め立てられている羽毛の有効利用は、未利用資源の多角的活用、廃棄物の量的減少化、公害防止の諸点から我が國のみならず国際的にもきわめて重要な急務の課題であるとの認識に立って、羽毛の新しい有効利用に関する研究に取り組み、継続研究を積み重ねた結果、従来製品とは本質的に別異の新しい羽毛微粉体を開発することに成功して、本発明を完成するに至った。即ち、本発明は、基本的コンセプトとして、特に、以下のような課題を解決する新技術を確立することを目標として完成されたものである。

- (1) 羽毛資源の大量処理技術として実用化が可能であること。
- (2) 従来の羽毛処理技術のように大量の溶剤の使用を伴うことがなく、環境汚染の問題のない、いわゆる環境セロ型の技術であること。
- (3) 操作が簡単かつ低成本の生産方法であること。
- (4) 羽毛に固有のβ構造を保持した製品を開発すること。
- (5) 従来の酸化剤、還元剤、酸、アルカリ及び蛋白変性剤などによる化学的可溶化法のように、羽毛を可溶化、低分子化して、α構造とする方法によらない生産方法であること。
- (6) 羽毛を低分子化することなく微細化処理した微粉体を製造すること。
- (7) 適宜の粒径を有し、且つ不純物の少ない高品質の羽毛微粉体を製造すること。

(4)

特開2001-322998

6

5

## 【0013】

【課題を解決するための手段】上記課題を解決するための本発明は、以下の技術的手段から構成される。

(1) 羽毛の $\beta$ 構造を保持した微粉体であって、羽毛を微弱アルカリ処理により低分子化することなく微細化処理し、得られた液体生成物を乾燥し、必要により粉碎処理してなる羽毛微粉体。

(2) 微弱アルカリ処理が0.1～1%のカセイソーダ溶液による処理であることを特徴とする前記(1)記載の羽毛微粉体。

(3) 羽毛の $\beta$ 構造を保持した微粉体を羽毛の微弱アルカリ処理により製造する方法であって、羽毛を微弱アルカリ溶液で処理して低分子化することなく微細化処理し、得られた液体生成物を乾燥し、必要により粉碎し、整粒することを特徴とする羽毛微粉体の製造方法。

(4) 微弱アルカリ処理を0.1～1%のカセイソーダ溶液により行うことを特徴とする前記(3)記載の羽毛微粉体の製造方法。

(5) 前記(1)又は(2)に記載の羽毛微粉体を適宜の形状、構造に成型、加工してなる羽毛微粉体の加工品。

(6) 前記(3)に記載の方法で製造した羽毛微粉体からなる紫外線吸収剤。

## 【0014】

【発明の実施の形態】次に、本発明について更に詳細に説明する。本発明は、上記のように、羽毛の $\beta$ 構造を保持した微粉体であって、羽毛を微弱アルカリ処理により低分子化することなく微細化処理し、必要により粉碎処理してなる羽毛微粉体である。ここで、微弱アルカリ処理とは、水溶液にしたときにアルカリ性を示す化合物、例えば、KOH、NaOH、Ca(OH)<sub>2</sub>などの金属水酸化物、酢酸ソーダ、リン酸ソーダ、ソーダ灰(無水炭酸ソーダ)等の塩類等を用いて、これらの微弱アルカリ溶液で処理することを意味する。本発明における微弱アルカリ処理には、中でも、KOH、NaOHに代表される金属水酸化物が好適なものとして使用される。また、本発明における微弱アルカリ処理とは、羽毛を、希薄な金属水酸化物の水溶液、好適には、羽毛を約0.1～1%のカセイソーダ溶液により低分子化することなく微細化処理することであり、本発明において、羽毛を低分子化することなく微細化処理するとは、後記する実施例に示したようにIR分析により羽毛の $\beta$ 構造が保持されていることが確認できる範囲で微細化処理することを意味する。本発明は、微弱アルカリ処理により羽毛の $\beta$ 構造を保持した微粉体を製造するものであり、従来法の化学的可溶化法により調製された粉末が $\alpha$ 構造をとるのとは本質的に異なるものであり、また、機械的粉碎法により粉碎した微粉体とも本質的に異なるものである。

【0015】羽毛原料としては、例えば、廻鶴処理場等より排出される羽毛が代表的なものとして例示される

が、特に制限はなく、羽毛をその前処理として、これを十分に洗浄した後、使用することが好ましい。羽毛の微弱アルカリ処理は、好適には、約0.1～1%のカセイソーダ溶液で、必要により、適宜、加熱、振盪、搅拌等の機械的処理を組みながら、処理する。この場合、通常、0.1%未満では微弱アルカリ処理の効果が弱くなり、また、1%を上回ると低分子化される可能性が高くなるが、これらの処理条件は、羽毛原料、微弱アルカリ水溶液の粗細、濃度、加熱、振盪、搅拌等の条件、 $\beta$ 構造の保持等を総合的に斟酌して適宜設定する。微弱アルカリ処理時に、加熱、振盪、搅拌等の機械的処理を組み合わせることにより、効率良く微細化処理を行うことができる。ここで重要なことは、後記する実施例に示したように、上記微弱アルカリ処理により羽毛を低分子化することなく微細化処理してIR分析による羽毛の $\beta$ 構造の保持が確認された微粉体を調製するようにすることである。

【0016】羽毛を微弱アルカリ溶液で処理して低分子化することなく微細化処理し、得られた液体生成物を、乾燥し、必要により仕上げ粉碎し、整粒を施し、目的の微細化された微粉体を得る。上記生成物として、上記微弱アルカリ処理物の液体部分を使用することができる。即ち、上記生成物としては、微弱アルカリ処理物の溶液(液体)の部分を用いることができる。次に、得られた生成物を乾燥し、必要により粉碎し、整粒するが、乾燥は、風乾によって行うことが可能であり、短時間に行う場合には、90°C以下で乾燥処理することが望ましい。粉碎、整粒は、例えば、ウイラー粉碎機に篩板(目の開き0.5ミリ以下)を付して行う。上記微弱アルカリ処理物は、その使用目的に応じて、適宜、粉碎、整粒の処理を組み合わせて容易に実施することが可能であり、上記微弱アルカリ処理物は、簡単な操作で、10μm以下の超微粉体に導くことができる。本発明において、羽毛を微弱アルカリ処理して低分子化することなく微細化処理して得られた生成物は、製品の使用目的により、ほとんど粉碎処理することなく、比較的大きな粒子形状で使用することも適宜可能である。このように、本発明は、羽毛の $\beta$ 構造を保持した適宜の粒径の微粉体を羽毛の微弱アルカリ処理と必要により粉碎、整粒処理を組み合わせることにより簡単に調製することを可能にしたことを最大の特徴とするものである。

【0017】羽毛が、アルカリ(NaOH、KOH)に加熱溶解すること、羽毛に多量に含まれる-S-S-結合を酸化又は還元する薬剤を併用すると、羽毛の溶解が容易になることは、昔からによって、明らかにされてきた(例えば、農田ら、皮革化学、12、117(1966))。

【0018】しかし、これらは、羽毛をアルカリ処理して可溶化、低分子化し、羽毛を完全に溶解することを意

(5)

特開2001-322998

7

國したものであり、従来のアルカリ処理法は、いわば羽毛の可溶化、低分子化の技術である点で、本発明の方法とは本質的に異なるものである。上記のように、本発明によって得られる羽毛微粉体は、羽毛のβ構造を保持した微粉体であって、羽毛を微弱アルカリ処理により低分子化することなく微細化処理することによりはじめて得られる新規な製品である。

【0019】天然素材の微粉化については、例えば、綿についてはシルクパウダーとして実用化が図られている。綿工業においては、衣料用に適しない短纖維が多量に副生するため、その非衣料分野への有効活用と用途開発が、綿工業の浮沈のカギを握るものとして注目されてきた。現在のところ、綿の非衣料用途への利用については、2つの流れが具体的に地歩を固めている。

【0020】藍・昆研-出光石化：藍・昆研では、綿の粉末化が可能であることを見出している。当時、出光石化では、天然素材（牛皮、セラチン等）の微粉化法を開発しており、この両者の連携によって、「シルクパウダー」の大手供給が達成された。このシルクパウダーは、工業用素材としては、塗料原料を中心とした用途開発が進められているほか、生体適合性ならびに環境適合性素材として、バイオポリマーという観点からも注目されている。

【0021】「かやシルクパウダー21」は、綿フィプロイン加水分解物70%とデキストリン30%より成る白色微粉体（医工大・平林教授の指導の下、京都府、丹後半島の加悦町（加悦純合振興有限会社）が、製造・販売している）であり、グリシン、アラニン、セリン、チロシンを主成分とするそのアミノ酸組成から、健脾食品として、脂肪肝・アルコール性肝炎、慢性肝炎、糖尿病、バーキンソン病、血栓コレステロール低下、高血圧・脳卒中の予防、皮膚障害の軽減、アトピーの改善に有効の由である。

【0022】このように、天然素材の微粉化については、羽毛以外にも、例えば、綿の微粉化が行われているが、羽毛は、他の天然素材と異なる成分構成及び微細構造（β構造）を有しており、当該β構造を保持した本発明の微粉体と綿の微粉体とは本質的に別異のものである。本発明により得られる羽毛微粉体は、羽毛のβ構造を保持した微粉体であること、不純物の少ない高品質の微粉体であること、簡単な操作で10μm以下の超微粉体に導くことができること、羽毛の微細構造に基づく特性を保持していること、高い熱外線吸収特性を有すること、後記する実施例に示すように、羽毛（未処理）のアミノ酸組成とは別異のアミノ酸組成を有した微粉体であること、機械的粉碎法による微粉体のように各種の夾雜物の混入がないこと、白色羽毛の場合、微弱アルカリ処理により漂白作用が得られること、純粋な羽毛微粉体を

8

生産できること、格別の設備を必要とすることなく簡単なプロセスで大量生産が可能であること、等の利点を有する。以上のとから、本発明の羽毛微粉体は、それらの特性を生かした各種の利用、例えば、適直の粒径の新素材、新機能素材、保湿材、保湿材、断熱材、紫外線吸収剤、油回収剤（タンカー事故発生時の海域汚染対処等）、油汚染物の洗浄（補助）剤、シート状の油吸収剤、軽量多孔体の特性を生かしたコンクリート相成均一化促進剤（重い粒子の沈降を防げ、均一な状態を維持する）、起泡剤（発泡剤）、多孔体の特性を生かした脱臭剤、等として多角的に使用することが可能である。本発明の羽毛微粉体は、そのまま使用しても良く、また、他の製品に配合して使用しても良く、また、適直の形状、構造に成型、加工した加工品として使用しても良く、その利用の分野及び使用形態等は特に限定されるものではない。

【0023】

【実施例】次に、実施例に基づいて本発明を具体的に説明するが、当該実施例は本発明の好適な例を示すものであり、本発明は以下の実施例によって何ら限定されるものではない。

実施例1

(1) 羽毛の前処理

廃肉処理場より取得した羽毛（白色レグホン系、羽毛は白色）を原料として使用し、その前処理として、当該羽毛から、肉片等の混入物を除去し、これを家庭用洗剤にて洗浄した後、十分に水洗して、風乾した。このようにして得た羽毛の組成について、水分をSartorius水分計で、また、全窒素をミクロケルダール法で分析した結果、次のとおりであった。

水分 13.7%

全窒素 15.0%

【0024】(2) 羽毛の微弱アルカリ処理

羽毛100gと1000mlのアルカリ(NaOH)水溶液を浸せて、以下の条件で羽毛の微弱アルカリ処理を実施した。浸漬(無搅拌)条件：2L容ビーカーを用いて、室温(25°C)で実施した。搅拌条件：5L容三角フラスコを用い、所定温度に設定したロータリーシューカー(80回転/分)による振盪下に実施した。

【0025】(3) 羽毛及び羽毛微弱アルカリ処理物の粉碎

羽毛(未処理品)及び微弱羽毛アルカリ処理物を、粉碎機(不二電機工業製、「Sample Mill K111-1」)にて、仕上げ粉碎した。微弱アルカリ処理品は、未処理品に比して、粉碎がかなり容易であり、得られた微粉体の粒子径は、次の通りであった。

【0026】

【表1】

## 粒子径 (μm)

羽毛(未処理品)微粉体	5~10 × 500~2000
微弱アルカリ処理羽毛微粉体	5~10 × 50~200

【0027】表1に見られるように、微弱アルカリ処理 10\* 羽毛微粉体の粒子径は5~10×50~200 μm以下 が認められた。  
羽毛微粉体の粒子径は5~10×50~200 μm以下 であり、未処理品の方が、微弱アルカリ処理品に比し て、その長径が大 (50~10×500~2000 μm) であった。なお、微弱アルカリ処理微粉体では、アメ

ルカリ処理の程度が厳しいほど、長径が小さくなる傾向 が認められた。  
【0028】鶏由来の羽毛(大羽)は次の部位と比率か ら成ることが知られている(盛田ら、皮草化学、15、

羽(ダウ部分)	羽枝部 (Barbs)	83. 9%
芯(羽の中心部)	羽軸部 (Rachis)	9. 8%
根(芯部の根元)	羽柄部 (Calamus)	2. 5%

羽毛の各部位毎に、その物性が異なることから、羽毛の 部位により、微弱アルカリ処理の影響も異なり、微弱アルカリ処理による羽毛の溶解は羽枝部から始まり、羽軸部と羽柄部は、最後まで残ることになる。換言すれば、 20 微弱アルカリ処理条件を選択することによって、例えば、羽枝部のみを選択的に溶解することが可能であり、本発明は、羽毛の各部位を選択的に微弱化する方法としても適宜使用することができるといえる。本実施例で試

供した羽毛は、鶏全身からのものであり、多くの種類の羽毛の混合物であることから、そのデータは、大羽のみについての盛田らのデータとは必ずしも一致しないが、微弱アルカリ処理を継続条件下で実施した場合には、羽枝部と羽軸部・羽柄部が分離されるため、分別して洗浄・乾燥後、吸油量を測定した。その結果を表2に示す。

【0029】  
【表2】

(7)

特開2001-322998

11

12

## 羽毛の微弱アルカリ処理結果

## 【アルカリ処理条件】

反応液組成：羽毛(100g)/NaOH水溶液(1000ml)

反応条件等：温度：室温(～25°C)、30°C、40°C、55°C、80°C

反応：振盪(6LA、80 rpm、15時間) or 静置(1L ピーカー、24時間)

## 【結果一覧表】

No.	羽毛(g)	NaOH(ml)	温度(°C)	振盪	部位	吸油量(g)
1	未処理品	—	—	—	全	(810) <sup>a</sup>
2	100	6.18	室温	—	全	638
3	100	6.38	室温	—	全	630
4	100	6.50	室温	—	全	645
5	100	1.00	室温	+	全	638
6	100	2.00	室温	—	全	699
7	100	0.30	30	+	羽・軸 枝	616
8	100	0.40	30	+	羽・軸 枝	600
9	100	0.50	30	+	羽・軸 枝	495
10	100	0.60	30	+	羽・軸 枝	620
11	100	0.68	30	+	羽・軸 枝	488
12	100	0.25	60	+	羽・軸 枝	—
13	100	0.50	60	+	羽・軸 枝	420
14	100	0.75	60	+	羽・軸 枝	—
15	100 <sup>b</sup>	1.00	60	+	羽・軸 枝	310
16	100 <sup>b</sup>	1.25	60	+	羽・軸 枝	—

<sup>a</sup>：粒子相互の凝集が著しく、正確な測定不能のため、参考値とした。<sup>b</sup>：ほぼ完全溶解のため、吸油量測定不能

枝：羽枝部(ダウ部分)

羽：羽柄部(芯)

軸：羽軸部(梗)

全：羽枝部+羽柄部+羽軸部

【0030】振盪の有無によって、微弱アルカリ処理物の状態は、著しく異なる。すなわち、浸漬条件下では、微弱アルカリ処理後も、ほぼ、羽毛の原型が保たれていたが、振盪下では、羽枝部(ダウ部分)が羽柄部・羽軸部から離れて沈降し、羽柄部・羽軸部は、反応系の表面に浮遊するため、それぞれを、分別して取得することができた。それゆえ、振盪条件下のものについては、部位別と、JIS吸油量の測定法に従って、吸油量を測定した。表2の結果は、次のように、要約される。

(1) アルカリ処理条件が厳しいと、羽毛は、完全に溶解する。

(2) 稼働条件での処理物は、粒子相互の凝集が見

られ、未処理羽毛粉碎物と似た外観を示す。

(3) 吸油量は、未処理品粉碎物では、凝集が著しく、正確な測定ができなかったが、その最大値は、600(g)見当と考へられる。

(4) 羽(羽枝部)と芯(羽柄部・羽軸部)では、吸油量に差があり、アルカリ処理条件が厳しくなると、羽のそれは、低下するが、芯については、著しい低下はない。

(5) 浸漬処理でも、NaOH濃度が高いと、本来の「中空構造」が部分的に崩壊し、吸油量が低下する。

【0031】表2、No. 13の溶解液について、市販透析膜を用いて、内容物が中性になるまで、水道水に対して透析した。得られた内容物を、凍結乾燥して得た淡

(8)

特開2001-322998

13

褐色多孔質粉末の吸油量は、300(%)であった。また、IR分析の結果は、その $\beta$ -構造を有付けるものであった(図1. Feather Powder)。

【0032】(4) 羽毛及び羽毛微弱アルカリ処理物のアミノ酸組成

羽毛及び羽毛微弱アルカリ処理物のアミノ酸組成分析した結果を、表3に示す。表3の数値から、羽毛微弱アルカリ処理物のアミノ酸組成

14

\* カリ処理物のアミノ酸組成は、羽毛(未処理)のアミノ酸組成と明らかに相違しており、羽毛微弱アルカリ処理物は羽毛(未処理)と別異の構造を有するものであることが、裏付けられた。

【0033】

【表3】

アミノ酸	羽毛 (未処理)	0.25% -NaOH 処理物	0.5% -NaOH 処理物	0.75% -NaOH 処理物
アルギニン	6.37	6.01	5.92	5.18
リジン	1.04	0.59	0.52	0.44
ヒスチジン	0.40	0.28	0.36	0.17
フェニルアラニン	4.52	4.54	4.60	4.54
チロシン	2.29	1.97	1.59	1.49
ロイシン	7.98	7.89	7.81	7.36
イソロイシン	4.49	4.61	4.49	4.60
メチオニン	0.35	0.27	0.19	0.23
バリン	7.27	6.89	7.68	7.59
アラニン	4.26	4.02	4.31	3.88
グリシン	7.40	7.08	7.05	5.56
プロリン	9.89	10.26	10.5	11.07
グルタミン酸	9.21	9.70	9.07	10.45
セリン	11.80	12.27	11.5	10.88
スレオニン	4.55	4.65	4.40	4.57
アスパラギン酸	5.87	5.71	5.77	6.05
トリプトファン	0.61	0.38	0.45	0.38
シスチン	7.49	4.55	3.91	3.18

%(g/100g)

【0034】(5) IR分析

河野ら(農芸化学会誌、48、7~14、1974)は、「羽毛および羊毛ケラチン溶液よりユバ(板皮膜の生成について)において、羽毛溶解物とその成形物(皮膜)について」において、羽毛溶解物とその成形物(皮膜)のIRスペクトルを示す。

※該のIR分析の結果を、以下の表4のように要約して

いる。

【0035】

【表4】

Amide I, II Frequencies of Extracted Powder and Film of Chicken Feather

Protein	Amide I (cm <sup>-1</sup> )	Amide II (cm <sup>-1</sup> )	Conformation
Extracted powder	1635	1535	$\alpha$ -form
Film	1630	1520	$\beta$ -form

【0036】 $\beta$ -構造を有する蛋白のIRスペクトルは、1630, 1525 cm<sup>-1</sup>に吸収極大を示すことが知られており(丹羽栄二: 日本農芸化学会シンポジウム「食品の水と物性」、p. 11(1971))。そのこ

とから、河野らは、ケラチンのコンフォーメーションは、溶液中では $\alpha$ -構造、皮膜では $\beta$ -構造をとるものと判断している。川口・伊ヶ崎(日本畜産学会会報、65(6) 564~570, 1995)も、その羽毛溶解粉末

(9)

特開2001-322998

15

16

が1630、1640 cm<sup>-1</sup>に吸収極大を示したことから、藍染粉末が、元の羽毛の高次構造を維持しているものと判断している。羽毛並びに羽毛微弱アルカリ処理物 **【表5】**  
羽毛及び羽毛微弱アルカリ処理物（羽毛微粉末）のIR分析結果

試料	Amide I (cm <sup>-1</sup> )	Amide II (cm <sup>-1</sup> )	Conformation	処理条件
羽毛（無処理）	1638.91	1520.51	β-form	表2 No. 1
0.25%-NaOH処理物	1639.12	1517.01	β-form	表2 No. 12
0.5%-NaOH処理物	1634.32	1518.54	β-form	表2 No. 13
0.75%-NaOH処理物	1637.07	1516.37	β-form	表2 No. 14

**【0038】** 上記表5及び図1の結果より、羽毛微弱アルカリ処理物（羽根部由来粉末）及び羽毛微弱アルカリ溶解物の透析残渣の凍結乾燥物は、羽毛本来のβ-構造を保持しているものと判断される。

**【0039】参考例1**

上記実施例1（表2、No. 1系）で得られた羽毛微弱アルカリ処理粉碎物（粒子径20.0 μm以下、吸油量8.35）を、針葉樹漂白パルプ（NBPK）と混合して抄※

※紙し、その吸油量を測定した。羽毛微弱アルカリ処理粉碎物配台紙の吸油倍率は、抄紙した各試験片（10×10 cm）を15秒間大豆油に浸漬し、引き上げて10秒後の重量を測定して、自重に対する倍率として算出し

た。その結果を表6に示す。

**【0040】**

【表6】

羽毛微弱アルカリ処理粉碎物配合率(%)		吸油倍率(%)
0		600
10		580
20		550
40		500
60		550

**【0041】参考例2**

上記実施例1（表2、No. 2系）で作製した羽毛微粉体に結合剤を混合し、手すき和紙作製の手順と同様にして、羽毛微粉体の不織布シートを作製した。煮沸により、保溫、断熱性の試験をした結果、保溫材、断熱シート等として有用であることが分かった。

**【0042】参考例3**

上記実施例1（表2、No. 2系）で作製した羽毛微粉体と結合剤の懸濁液を調製し、これを基材の表面に薄く被覆し、羽毛微粉体のシートを作製した。

**【0043】実施例2**

上記実施例1で得られた粉末（図1、Feather Powder）について、その紫外線吸収性評価を、対照として蒸留水、陽性対照として牛血清アルブミンを使用し、以下の試験法で実施した。所定濃度の試料の蒸留水試験液3mlを含む1cm石英キュベットに、室温下

10分間UVC（254 nm）ランプ（市販品）を照射してその透過UVC量を測定した。その結果、図2に示した様に、実施例1で得られたFeather Powderが、広い波長範囲にわたって、陽性対照の牛血清アルブミンに比較して、紫外線の中で最も強力な（人体に有害）UVCを極めて高度に吸収する機能を有することが判明した。この結果は、本発明の羽毛微粉体は優れた紫外線吸収作用を有することを示すものである。

**【0044】参考例4**

上記実施例1（表2、No. 2系）で得られた羽毛微粉体を、更に機械的に粉碎して超微粉体（粒子径5～10 μm）を作製し、紫外線（UVC）吸収・遮蔽機能を以下の方法で測定した。尚、対照として蒸留水、陽性対照として微粉化炭酸カルシウムを用いた。254 nmの吸光度が同一の所定試料の懸濁蒸留水を調製し、2%アガロースと混合してシート状に成形して試験片とした。実

(10)

17

施例2と同様にUVC (0.6 mW/cm<sup>2</sup>) を室温下5分間照射して、その透過率を測定した。その結果を図3に示す。超微粉化羽毛(Feather Fine Powder)は、陽性対照に対して2倍の吸収・遮蔽効果(吸収性、散乱性)を示すことが判明した。この結果は、本発明の羽毛微粉体は、高い紫外線吸収・遮蔽効果を有すること、そして、それ自身安全性が高く、且つ肌に優しい優れた紫外線(特に、有害なUVC)カーバ化試品用新素材になり得ることを示すものである。

## 【0045】

【発明の効果】以上詳述したとおり、本発明は、羽毛のβ構造を保持した微粉体であって、羽毛を微弱アルカリ処理により低分子化することなく微細化処理してなる羽毛微粉体であり、本発明により、1) 羽毛のβ構造を保持した新規な微粉体を提供することができる、2) 羽毛の特性を維持した微粉体を大量にしかも安価に供給することができる、3) 未利用資源として貴重な羽毛を、有用な新素材として、多角的に有効利用することができる、4) 農業廃棄物として、また、公害発生源として社会問題化している羽毛を、有効資源として利用することが可能となり、その組め立てに要する場所・手本

10

20

特開2001-322998

18

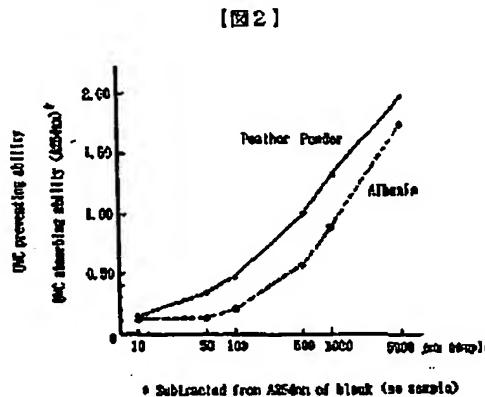
\* 間・保管場所・局影響などの軽減ないし根絶が期待される、5) 不純物の少ない高品質の新規な羽毛微粉体を提供することができる、6) 上記羽毛微粉体は、新種堆素材、保湿材、断熱材、熱外線吸収剤、油回収剤(タンカーアクシデント発生時の海域汚染対処等)、油汚染物の洗浄(補助)剤、シート状の油吸収剤、粗粒多孔体の特性を生かしたコンクリート組成均一化堆持剤(重い粒子の沈降を妨げ、均一な状態を維持する)、起泡剤(発泡剤)、多孔体の特性を生かした脱臭剤としての多角的な利用が期待できる、等の格別の効果が要される。

## 【図2】の簡単な説明】

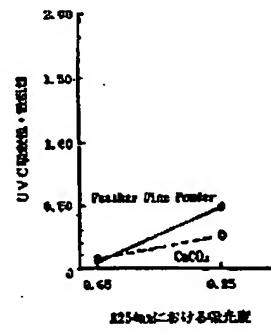
【図1】羽毛(無処理物)、羽毛微弱アルカリ処理物及び対照(ケラチンパウダー)のIRスペクトルの説明図を示す。

【図2】羽毛の微弱アルカリ溶解物を透析膜にて透析して得られた内容物の凍結乾燥物(淡褐色多孔質粉末、図1におけるFeather Powder)のUVC吸収性評価試験の結果を示す。

【図3】羽毛超微粉体(Feather Fine Powder)のUVC吸収性・遮蔽性評価試験の結果を示す。



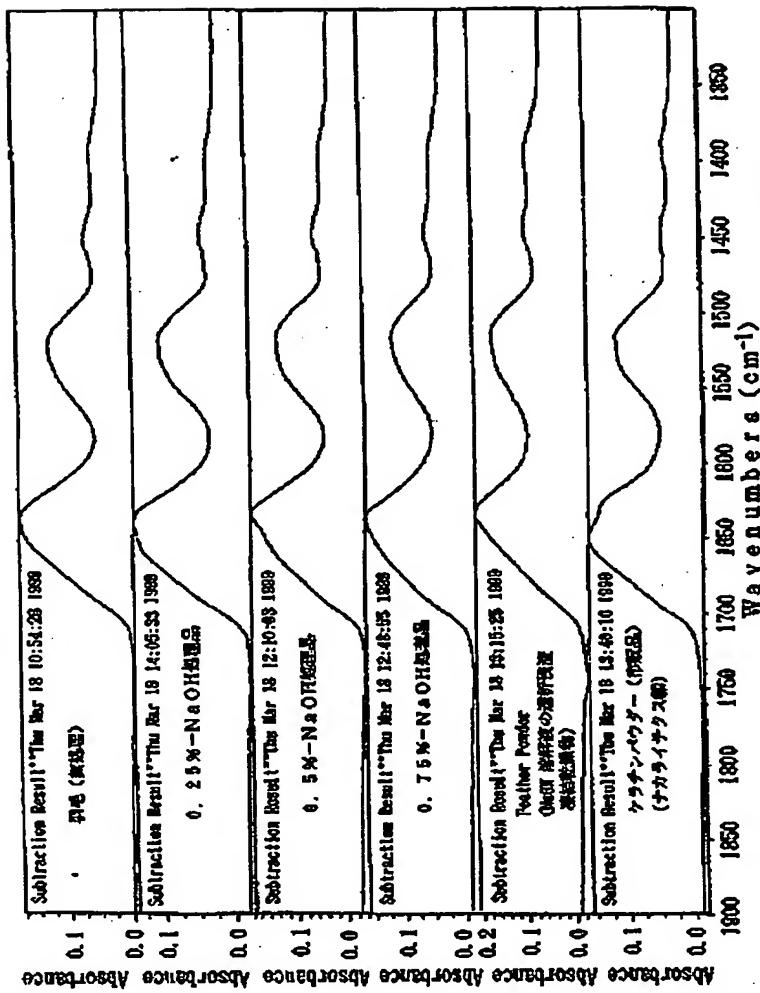
【図3】



(11)

特開2001-322998

[図1]



フロントページの続き

(72)発明者 水野 雄之  
東京都千代田区神田神保町2丁目46番地  
株式会社ジャニフ・テック内

(72)発明者 名邊 義剛  
東京都千代田区神田神保町2丁目46番地  
株式会社ジャニフ・テック内

**This Page is Inserted by IFW Indexing and Scanning  
Operations and is not part of the Official Record**

**BEST AVAILABLE IMAGES**

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images include but are not limited to the items checked:

- BLACK BORDERS**
- IMAGE CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES**
- FADED TEXT OR DRAWING**
- BLURRED OR ILLEGIBLE TEXT OR DRAWING**
- SKEWED/SLANTED IMAGES**
- COLOR OR BLACK AND WHITE PHOTOGRAPHS**
- GRAY SCALE DOCUMENTS**
- LINES OR MARKS ON ORIGINAL DOCUMENT**
- REFERENCE(S) OR EXHIBIT(S) SUBMITTED ARE POOR QUALITY**
- OTHER:** \_\_\_\_\_

**IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.**

**As rescanning these documents will not correct the image problems checked, please do not report these problems to the IFW Image Problem Mailbox.**